

# 韓国の宗教系学校における宗教教育の現状

## 1 はじめに

韓国の教育制度や学校教育の内容は、日本と類似しているといわれる。これは宗教教育についてもある程度あてはまる。まず、大韓民国憲法では、宗教の自由とともに国教は認められないことと宗教と政治との分離がうたわれ、信教の自由と政教分離の原則が明確にされている。また、一九九七年に制定された韓国の教育基本法には次のようにある。

第六条（教育の中立性）①教育は教育本来の目的に沿って、その機能を果たすよう運営されなければならない

いそおか てつや  
磯岡哲也

らず、いかなる政治的・党派的又は個人的偏見の伝播のための方便としても利用されてはならない。

②国家及び地方自治団体が設立した学校においては、特定の宗教のための宗教教育をしてはならない。

第二十五条（私学の育成）国家及び地方自治団体は、私立学校を支援・育成しなければならない。私立学校の多様かつ特色ある設立目的が尊重されるようにしなければならない。<sup>1)</sup>

これは、一九四八年に制定された憲法を受けて、四九一年に教育の基本的事項を規定した教育法が制定されたのち、三八回の改正を経て、一九九七年に三章二九条から

なる教育基本法として新たに制定されたものである。教育の中立性の原則のなかに、公立学校における宗派教育を禁じる一方で、宗教系を含む私学の特色を尊重する内容となっている。このように、宗教教育をめぐる基本的な環境は日本との共通点がみられる。

相違点は、宗教教育のみならず学校教育全体への国家管理が比較的強いこと、中等学校におけるいわゆる平準化政策とその影響、全体社会の宗教状況と人々の宗教への認知などである。これらの諸点が宗教系学校における宗教教育のあり方を大きく規定しており、そのなかで韓国の特色を看取することができる。

本稿では、最初に韓国の教育制度と教育環境の一般的特徴を概観したのち、中・高等教育の例をとおして宗教系学校における宗教教育の実態を把握したあと、標準化にまつわる問題点を考察していく。

## 2 韓国の教育制度の特色と教育熱

### (1) 制度からみた韓国の学校教育

韓国の学校教育制度は、日本と同様七歳から六年間の

初等学校（以下、小学校）、三年間の中学校、三年間の高等学校、その後は、二年間の専門大学と四年間の大学校（医科大学などは六年間）、大学院となっている。

小学校と中学校のカリキュラムは、日本とほぼ同じであるが、小学校三年から週に二時間英語が科目として設定されている。中学校への入学は、一九六九年度より無試験進学制が導入され、全体の約四分の一を占める私立中学を含めて、入学者は抽選によって学区内の学校に振り分けられる。高等学校は、一般系高校と実業系高校に分かれるが、一九七四年よりソウル特別市において一般系高校での平準化が実施されており、その対象地域は都市部を中心に順次拡大している。これは、まず地域ごとに試験を実施して一般系高校進学者を選抜した後、中学校と同様に、私立も含めた高校を地域単位の学群に分けて、抽選により無試験で各学校へ入学者を振り分ける制度である。このことにより各高校とも学力は均一化するが、生徒や保護者が学校を自由に選択することはできなくなる。政府がこれらの施策を強力に推し進めた背景には、大学受験勉強の過熱ぶりが高校や中学の入学試験に

まで蔓延した状況があった。また、このような大ナタをふるい得たことは、政府の学校教育への統制力を示すものといえよう。

韓国では、一九八〇年前後と九〇年代において高等教育入学者が激増しているが、これは大学数と入学定員を増やした国家の政策による。また九四年から大学進学希望者は全国規模の大学修学能力試験（以下修能試験）を受験しなければならず、その得点によって入学する大学を決定している。これにより大学の序列化が明確になり、私立大学の独自性や特色が希薄化している。

## (2) 学歴主義と教育熱

本節では、保護者や生徒の間に定着している学歴主義志向と、教育熱という角度から韓国の学校教育をみていく。平準化により高校間の進学率の格差は改善されたが、受験勉強の過熱ぶりが解消したわけではなかった。

韓国の学校教育の特徴を示すキータームの一つに学歴主義がある。二〇〇〇年現在、高校卒業者の現役進学率は、一般系高校の場合で八三・九%、実業系高校で四二

三・四、中学卒以下五四・〇となっている。<sup>(4)</sup>ここには学歴要因ばかりでなく、性別、職業別の格差も絡んでいることに留意すべきである。いずれにせよ、保護者や子どもが大学進学を強く希望する理由はここにある。

大学のなかでも、大企業の本社が多いソウル特別市に位置する大学に人気があり、ことに経営学部や法学部が就職に強いとされている。このようなことから、保護者は子どもが小学校の頃から修能試験に備えて、学院（塾）や家庭教師などの課外教育に熱心になる。児童は、放課後は学院に通い帰宅は深夜に及ぶことも珍しくない。夜一〇時頃に小学生が、コンビニエンスストア前のベンチで、菓子パンやラーメンを食べている姿は都市部の日常的風景といつてよい。経済的に余裕のある家庭では、毎日のように家庭教師を雇っている。実際、韓国ではGDPに占める学校外教育費の割合が二・九六とOECD加盟国の中で一位となっている。<sup>(5)</sup>

また、放課後、夜一〇時まで教室に残って勉強することが義務化されている高校が少なくない。そのような高校では、生徒の質問等に対応する教師も深夜まで指導し

%、全体で六八%に達している。一九八〇年には同様に一般高校三九・二%、実業系高校一一・四%、全体二七・二%、九〇年には一般高校四七・二%、実業系高校八・三%、全体三三・二%であったことから、進学率の急速な伸びを看することができ<sup>(2)</sup>。これは、解放後の大学数と大学生数の増加によるのだが、根本的な要因として、大学卒の肩書きが、単なる肩書きにとどまらず収入が多く社会的威信のある職業に就く条件であるという国民的信念が韓国社会に定着していることがある。実際、解放以降、高校卒と四年制大学卒の間には、就職や収入の面で大きな格差が存在していた。一九八〇年代以降はその差はいくぶん緩和の傾向にあるとはいえ、少なくとも格差が未だ残り、人々の意識の面でも依然として学歴主義が根付いている。たとえば、二〇〇〇年現在の労働部の統計によれば、大学卒以上男性の一月月賃金一八八万二〇〇〇ウォンを一〇〇とした指数は、専門大卒男性は七三・一、高校卒男性は七〇・五、中学卒以下男性は六四・六である。女性の場合は、同様に大学卒一三九万六〇〇〇ウォンに対し、専門大学卒七〇・五、高校卒六

ている。我が子のために毎日、暖かい夕食を教室まで白家用車で運ぶ母親も多い。巷間では修能試験が終わるまでは、母親は子どもの世話で職業を持つことができないとさえいわれている。

韓国の生徒の学力は、先進国のなかでも高い水準に達している。二〇〇三年には、OECDが世界四一ヶ国・地域の一五歳生徒（高校一年）を対象に実施した学業到達度調査で、韓国が問題解決能力で一位、読解力で二位、数学的リテラシーと科学的リテラシーではそれぞれ三位・四位に上昇したことが報道されている。<sup>(6)</sup>高い教育熱が国全体の学力を押し上げているのである。

## 3 宗教系学校における宗教教育

### (1) 教育政策と宗教系学校

本節では、平準化政策と学力政策である教育課程の視角から宗教系私立学校をとりまく状況をみていく。

宗教系私立学校にとって平準化は両刃の剣であった。生徒募集の苦労がなくなり、少なくとも補助金の恩恵を受けられる反面、建学の精神に則った独自性をもった力